

プラネタリウムはいかがでしょう

12月2日に、星友達の津村氏が勤務されている和歌山市こども科学館のプラネタリウムがリニューアルのため最終投影を行うとのお知らせがありました。特にこの最終投影には、津村氏が久しぶりに解説に登壇するというので、これまでもワディファームなどで南天の星空を軽妙な語り口で解説をいただいているものの、本業のプラネタリウムでの解説は一度も聞かせていただいたことがなかったことから、この機会は外せないと期待も高まりました。

幸いにも松阪市天文台の仲間もぜひ行きたいということでしたので、C氏に車を出していただき、後部座席に収まって楽チンな和歌山行になりました。また、和歌山と言えば「お城とラーメンは外せないよね！」ということでおプションに織り込んでもらいました。

さて、15時ごろに科学館に到着すると、科学館の玄関前に貼ってある整理券は既に1/3ほど減っている状況で、あぶれることがないように番号札をゲットして開演が近づくまで和歌山城の見学とお土産探しに向かいました。

そして1時間ほどで科学館に戻り、昭和レトロの雰囲気も漂う科学館の展示を1階つつ昇りながら見て回り、科学工作のヒントなどを探すなどしているうちに最上階のプラネタリウムのフロアにつきました。



上：ご本尊のMS10 右：アナログな操作卓

ほぼ満員御礼状態の会場には、天文雑誌などでお見かけしたことのある諸先輩方の姿も多くみえ、これまで科学館が果たしてきた役割と津村氏の人脈の深さを感じました。

津村氏による経過説明で始まった16時半からの最終投影は、今夜見える星座を皮切りに、プラネタリウムの機構の説明も加えながら予定の時間を目いっぱいかけて（オーバーして）最後には南半球の星空まで大サービスの解説でした。津村氏の落ち着いた解説はアナウンスのプロというよりは、森羅万象を知り尽くした仙人（ヨーダか？）のような語り口で、安心した気持ちで最後の星空を楽しむことができました。そして投影後にはみんなで集まっての記念撮影が行い、さらに投影機をくまなく見せていただく機会をいただいて、津村氏らしい工作によるオリジナルのオプション部品がここかしこに附属されている様子なども見せていただきました。

80年代のプラネタリウムはまだアナログ的で手を加える余地があったのだと思いますし、機器の隅々まで熟知されていてこそ100%以上の活躍をしてきた機械なのだと感じました。

また、とても驚いたのは、御本尊MS10の星像で、今まで古いタイプのプラネタリウムという星がぼてっとして丸いという印象を持っていたのですが、その鋭い星像は最新の機械と何ら遜色なく、引退させるのがとてももったいないと感じました。

こんなことで、親しい仲間とのプラネタリウム見学は、たくさんの発見があるお出かけでした。もちろんラーメンもいただいたの帰宅となりました。



さて、それから 1 か月もたない年末に東京へ出かけた際、有楽町に新しくオープンしたプラネタリア TOKYO を見に行きました。ここは、デジタルと光学の 2 つの異なったタイプのプラネタリウムドームや VR シアターが併設された娯楽施設(早い話がデートスポット)で、「天空」を見たからもういいよ」と渋る奥さんに(今回は)秋葉原巡りをあきらめることを交換条件に時間を融通しての見学となりました。(どっちもどっちですがな)

さて 2 つのプラネタリウムのうち、今回は冒険を避けて光学式(ドーム 2)の方を観ることにし、チケットを買って開演までの間、ショップを観たり怪しげなドリンクを買ってみたり、流れ星を待ったりして時間を過ごしました。

開場時間が来てドームに入ると席の配置ははともゆったりとしていて、前や後ろの人をあまり気にすることなくリクライニングできるなど快適な感じでした。また、中央に鎮座している投影機は、偶然なことに今度和歌山市こども科学館に新しく設置されるプラネタリウムと兄弟機(CosmoLeap Σ)で、星の色もよく再現されていて微恒星も多くさすが新鋭の機械だと感じました。番組の方はシス

テムのほうに気を取られすぎてあまり記憶に残らなかったのも、次の機会には趣の違うデジタルの方をみたいと思っているのですが、さて、いつの機会になるのやらです。



ということで、今月は新旧の 2 つのプラネタリウムを連続して観る機会となりましたが、MS10 があまりにも素晴らしかったこともあり、新鋭機の印象がいささか薄れてしまいました。

ちょっと期待薄だけれど、もし和歌山(CosmoLeap Σのほうね)で津村さんが解説する機会があったらまた知らせてください。

Books & CDs

星空の演出家たち~世界最大のプラネタリウム物語~

中日新聞社

平成 23 年にリニューアルオープンした名古屋市科学館のプラネタリウムは、世界最大のドーム径を誇るということもあり、開館以来盛況が続いていました。そのうちに行きたいと思っていたものの、行列に並ぶのが嫌な性分なので、状況が落ち着くのを待っていてもなかなか衰える気配が無く、ようやく観に行ったのは平成 27 年になってのことでした。(それでも 30 分くらい並んだ)

この本は、その名古屋市科学館リニューアルの記念誌的な位置づけの読み物で、勤務されている学芸員の方々の日常を綴りながらプラネタリウムのバックヤードや解説者としての気構えなどが紹介されており、気軽ではありますが深く読むことができました。

実は、普段、本屋さんで立ち読みをしていて気にかかる本を見つけた時は、申し訳ないことながら一旦アマゾンで中古の値段を確認していて、こ

の本も検索してみると本体 52 円(!)送料 299 円ということでしたので、迷うことなく購入ボタンを押しました。中古本の値段というのはまさに文章(又は内容)そのものの価値を表すのだと思うのですが、WEB で様々な文章が氾濫する中で、手元に供えていつでも手に取りたいと感じさせるだけの価値が書籍には求められているようです。



編集雑記

プラネの解説員の方のお仕事は大変です。ドームでの解説や講演といった表舞台に加え、これを支えるため背後には自主的な研究や教材作り等時間で計れない仕事がたくさんあって、職業としてだけで

見ると完全にブラック(ホール)だと思います。働き方改革の波の中こういった仕事はどういうことになっていくのでしょうか。重力崩壊しませんように。

Kz_Wada 和田一人 Kazuto.wada@nifty.com